

Students

Faculty members

Administrative staff



A.G.U.

Aoyoma Gakuin University

Faculty Development Activities Report 2005

●●●● 青山学院大学FDプロジェクトチーム ●●●●



CONTENTS

『FD プロジェクト活動報告』発行にあたって	1
FD って何? FDをとりまく環境	2
大学新任教職員オリエンテーションの開催	3
FD公開シンポジウムの開催	4
FD合宿研修会の開催	7
授業公開の実施	9
学生モニターからの意見聴取	13
学生モニターとの意見交換懇談会の開催	14
学生による授業改善のための学生アンケート実施状況	16
学生からの意見聴取の実施状況	17
2005年度のプロジェクト活動を振り返って	18
2006年度の活動に向けて	19

『FD プロジェクト活動報告』発行にあたって

副学長
国際政治経済学部・教授
FDプロジェクトチームリーダー

仙波 憲一

2005年度発足したFDプロジェクトチームの一年間の活動を、この度報告書としてまとめましたので、各教職員の方々、または各部署でのFD活動に資することができれば幸いです。

本プロジェクトは、大学のFD活動とは何かの理念論からはじまり、本学において実行可能な活動の策定とその提案まで幅広く検討することを目的にするものです。当初、発足時は教員のみでしたが、議論を重ねるうちに、教育活動は教員のみならず職員との協業が必要不可欠であるとの認識に立ち、FDプロジェクトチームメンバーに職員を加え今日に至っております。さまざまな活動を通して、また提案をしていく中で、青山学院大学の教育活動が活性化し教育の質が高まり、結果的に学生の学びが充実することにつながれば、大きな成果を挙げたことになると思います。皆様方のFD活動に対する御理解と御協力をお願いする次第です。

2005年度FDプロジェクトの主な活動

- 1 大学新任教職員オリエンテーションの開催
- 2 FD公開シンポジウムの開催
- 3 FD合宿研修会の開催
- 4 授業公開の実施
- 5 学生モニターからの意見聴取
- 6 学生モニターとの意見交換懇談会の開催

FDって何?

FDをとりまく環境



文学部・専任講師 杉谷 祐美子 (FD プロジェクトチームメンバー)

「FD」とは「Faculty Development」の略であり、一般に「教員集団の資質開発」と訳される。「教員集団」という語からも明らかなように、個人を越えたところの集団、組織で取り組む点にその意義がある。すなわち、FDは学科、学部、大学全体などで、組織的・計画的に資質開発に取り組む研究・研修活動を意味するのである。

大学教員の活動範囲は幅広い。資質開発といっても、より広義には、教育・研究・社会サービス・管理運営にわたる大学の諸活動全般を含むが、長年、研究志向が強いといわれてきた日本の大学においては、狭義の教育を中心とした取り組みに特化して用いられている。具体的には、教育改善を目的とした講演会や研修会、学生による授業評価、授業公開、表彰制度、授業開発研究などさまざまな活動が挙げられよう。

FDが目目されるようになったのはごく最近のことと思われるかもしれないが、すでに1980年代半ば頃から、一般教育学会（現大学教育学会）をはじめとして、大学基準協会、国立大学協会、私立大学連盟等の学協会で取り上げられてきた。しかし、実際に各大学で着手されるようになったのは、一部の大学を除けば、18歳人口の減少を背景に大学経営に対する危機意識が強まってきた90年代に入ってからである。

一方では、学生の学習意欲や学力の多様化が顕在化し、他方では、国内外を通じて高等教育の質保証への要請が高まるなか、FDは急速に進展していくことになる。この勢いに拍車をかけたのが、1998年に出された大学審議会答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－』である。答申をうけて、大学設置基準上、「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。」（第25条の2）と規定され、FDが努力義務化されるに至った。文部科学省の調べによれば、1998年度には約37%の大学がFDを実施していたところ、2003年度には約69%にまで普及している。

このようにFDはどちらかという外圧によって推進されてきたことは否めない。しかし、教育改善の重要性を何よりも認識しているのは、日々学生と直接向き合う当事者たる個々の教員にはほかならないだろう。信賞必罰によって教員をいたずらに萎縮させるのではなく、そうした日常的な教育実践上の悩みや工夫を教職員の間で共有しあい、組織全体の教育を活性化していくことこそ、FDの本義といえる。

FDの制度化には、発展段階説というものがある。全国の学長を対象として各大学の現状を尋ねた広島大学の調査（2003年実施）によれば、5段階にわたる発展段階について次のような結果が明らかにされた。

- ①FDとはフロッピーディスクだと多くの教員が思っている段階（4.7%）
- ②FDの委員会を設置して研修会等を行うような比較的初期的な段階（53.0%）
- ③委員会活動が軌道にのってかなり安定した状態にある段階（20.9%）
- ④ボトムアップの取組みが育たないなどの種々の問題が生じる段階（14.3%）
- ⑤FDを最初からやり直すべく新たな体制による創意工夫を開始した段階（7.2%）

（広島大学高等教育研究開発センター編

『FDの制度化に関する研究（1）－2003年大学長調査報告－』

（COE研究シリーズNo.9）、2004年より。）

本学がどの段階にあるかはさておき、最終段階に近づくにつれ、FD活動が個々の教員の自主性や主体性をよりどころとして深化していくことがここからうかがえよう。

古くは(財)大学セミナー・ハウス、近年では、全国大学教育研究センター等協議会、メディア教育開発センターなど、大学の垣根を越えた全国的なFD研究・実践のネットワークも形成されてきている。本学の取り組みが学内はもとより、それにとどまらず、今後は学外にも視野を広げて、日本の大学教育全体の活性化につながっていくことに期待したい。

大学新任教職員オリエンテーションの開催

国際政治経済学部・教授 仙波 憲一
(FDプロジェクトチームリーダー)

本学院に新たに就任する教職員に対して、学院では毎年4月上旬に「新任教職員オリエンテーション」を実施しており、理事長、院長、常務理事により、学院の概要、教育環境の外的・内的要因による変化、教育方針、キリスト教教育、寄附行為及び私立学校をとりまく法体系、学院の財政などについて説明がなされている。

そこで、2005年度より、特に大学に就任される方を対象とし、より詳しく大学の状況を理解していただく目的で、大学主催のオリエンテーションも別途実施することとした。日程の関係で、4月1日(金) 11:30から1時間、青学会館で昼食をとりながらの開催となった。大学側の参加者は、武藤元昭学長をはじめ、仙波憲一学務・学生担当副学長、魚住清彦総務・広報担当副学長、杉浦勢之学長補佐、東方敬信大学宗教部長、岸實大学事務局長が出席し、新任の出席者は、教員37名、一般職員8名であった。オリエンテーションは聖書朗読と開会祈祷によって開会し、各先生方から、大学の運営方針、建学の精神、アドバイザー・グループ制度、相模原キャンパス、青山スタンダード、事務取り扱い等、本学の特色について説明がなされた。今年度は初年度ということもあり限られた時間での開催となったが、新任の方々を迎える側にとっても、また就任する側にとっても、意味のあるオリエンテーションであったと考えている。今後も継続的に開催するとともに、新たに本学に就任される方々には、永年培われてきた本学の伝統や特色を十分ご理解いただき、それぞれの与えられた役割においてご活躍を期待したいと考えている。



FD公開シンポジウムの開催

実施の目的、実施概要

文学部・専任講師 杉谷 祐美子

(FDプロジェクトチームメンバー)

2005年6月15日、「これからの大学教育とFDのあり方」をテーマに、「第1回FD公開シンポジウム」が開催された。本学のFD活動の第一歩として、まずは現在の大学教育を取り巻く諸状況や、他大学の先進的な取り組み等を理解し、本学らしいFD・SD活動を検討する契機にしたいというのがその趣旨である。

講演者には、長年、FDの研究と実践の両面でご活躍の井下理教授（慶應義塾大学）と安岡高志教授（東海大学）をお招きした。両氏はともに大規模な私立大学において、80年代、90年代という早い時期から授業評価などを実施されるとともに、日本のFD活動を先導してきた財大セミナー・ハウス、また、日本私立大学連盟の研修運営委員会の活動などにも尽力されてこられた。井下教授には「FDの展望と課題」と題してFDに関する総論を中心に、安岡教授には「単位制度と授業評価」として東海大学の事例を中心にお話いただいた。

当日は武藤元昭学長からのご挨拶にはじまり、講演は各約1時間、質疑・総合討論も1時間以上、休憩を含めて全体で約4時間の長丁場となった。討論総括は今井重孝教授、閉会の挨拶は仙波憲一副学長にお願いし、司会進行は僭越ながら杉谷が務めさせていただいた。講演者を除いた参加者は、教員41名、職員39名、学生・学外者等8名の計88名。直接会場で発言をされた方は多くはなかったが、あらかじめ用意した用紙を用いて質問・意見を数多く頂戴し、その一つ一つにお二人の先生方から丁寧にご回答いただいた。御講演者をはじめご参加いただいた方々には、大変実り多い時間を共有できたことにこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

講演内容の詳細はその後刊行された講演記録集に譲るとして、ここでは特に印象に残った点を紹介したい。井下教授は、教育は集団によって、組織で改善していくことこそが大切だと繰り返し述べられた。「大学の4WD」、すなわち大学を構成

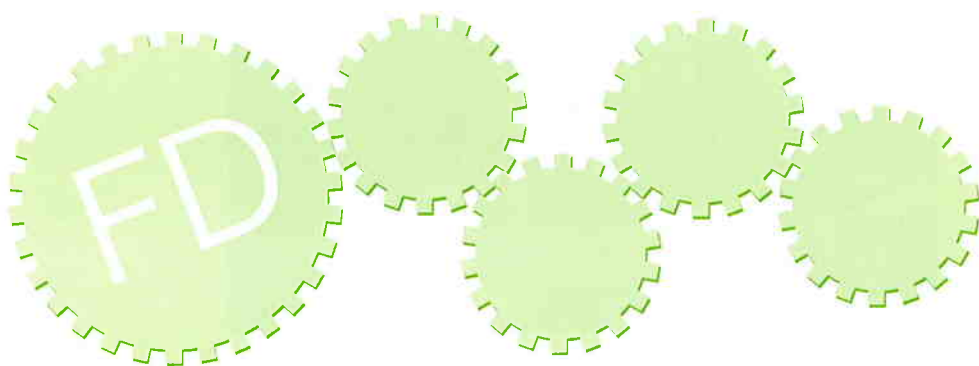
する教員、職員、学生、経営者（あるいは社会）という四輪がそれぞれにきちんと駆動することによってFDを活性化させていけるとの御提言であった。他方、安岡教授からは、まずは学生に勉強させるシステムづくりが先決であり、そのために授業外の学習を含めて学習時間を設計する単位制度の趣旨の理解と充実が必要だというお話をうかがった。また、明確な教育目的・目標を設定して評価を行い、結果を公開する組織は社会から信用されると強調された。

両氏に共通していたのは、自己目的化・形骸化した、生き残り戦略に終わらないFD活動を求める姿勢である。18歳人口の減少によって厳しさを増す競争的環境のなかで、ともすると、高い評価を得るがために、あるいは資金獲得を狙って、FDや評価が自己目的化してしまう。しかし、目的はあくまでも教育改善や教育研究の質的向上であって、それらの目的を達成する手段こそがFDであり評価なのである。そこが本末転倒にならないようにと警句を寄せられたのは、非常に示唆に富むお話だったと思われる。

また、そのためにも、一方的に外部社会からの圧力に追い立てられるばかりでなく、教職員の内発的な動機づけに支えられたボトムアップ型のFDの機運をいかに醸成していくかが重要になるという。競争による活性化といった方策ばかりが取り沙汰される現在、講演をうかがって、FDが集団、組織としての資質開発なのであって、協力、協働という営みが不可欠だという原点を再確認できた。

こうしたFDの本質を学べたシンポジウムは、これからFD活動に乗り出そうとしていた本学にとってまさに第1回目にあふさわしいものになったといえよう。今後もこうした積み重ねのうえに、シンポジウムのさらなる発展に微力ながら努力していきたい。

なお、講演記録集は残部があるので、ご希望の方にはお譲りしたい。



参加者アンケートの集計結果・感想

シンポジウムで行ったアンケートの集計結果をもとに

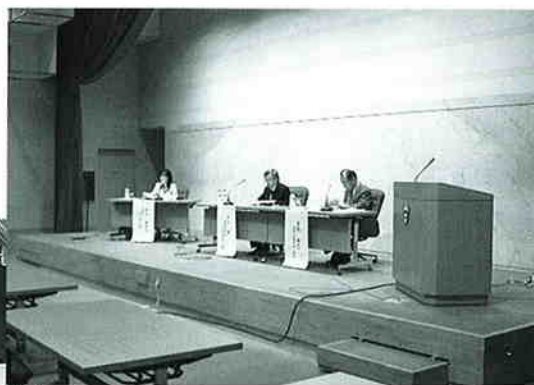
シンポジウム当日に回収させていただいた「参加者アンケート」の集計は別掲のとおりであるが、今回のアンケート項目作成のポイントとしては、「授業運営上の悩み」を記述いただくこととした点である。これは、まず現状で先生方が個別に抱えている問題点を理解するとともに、今まで個人レベルでは解決できなかった問題点を、集団や制度によって解決できないものか、何とかその糸口を見つけ出そうと考えたからである。すぐに対応可能なものとそうでないものがあるが、回答のなかでご要望の多かった「公開授業」については、早速準備が進められ、後期に実施するに至った。今後のプロジェクトの活動としては、今までにはなかったであろう「悩みを共有する機会」を提供することからスタートし、その中から望まれる協力体制を探り、少しでも先生方や学生にとって好ましい授業環境を実現していくことであると考えられる。

学生が社会人としての進路を決める大切な4年間を過ごすことや、講演会での「学ぶ、成長する喜びを得ることのできる環境を組織全体で作っていく（井下先生）」、「構成員がわくわくする目標設定でなければならない（安岡先生）」などのご提言もふまえると、「大学の運営は、学生にとっても教職員にとっても、個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作りを実現すること」が重要であると感じた。そうであれば、FD活動は単に先生方の教育内容や成果の向上に限定されるものではなく、また、職員

学長室 浜本 嘉郎

(FDプロジェクトチームメンバー)

のSD (Staff Development) 活動とも密接に連携をとりながら向上させていかなければならない。特に、学生と継続的に関わることの少ない職員は、「今の学生がいったい何を望み、何に悩んでいるのか」といったことを常に見ようとする姿勢をもつことが大切である。例えば、学生の正課外活動等に積極的に参加し、それらの活動を通して肌で感じ取るものが、実は大学構成員として業務を行っていくうえで一番大切にしなければならないことであるように感じている。学生1人1人をたくさんの視点で見つめることにより、それぞれの隠れた可能性を引き出すこととなる。2006年度からは新学習指導要領で学んだ高校生の入学により、学力低下や学習意欲低下といった不安もあるが、様々な仕組みを用意し、青山学院大学で学ぶモチベーションを早い段階で引き出すことが大学全体の活性化につながるものと考えられる。教員・職員といった職制の違いや、学部・研究科間の学問・研究領域等の違いもあるが、「ある程度の誤差を認める（安岡先生）」ことにも十分配慮しながら議論を重ねることにより、点が線となって青山学院大学らしいFD・SD活動の方向性が見えてくるような気がする。



「FDシンポジウム」参加者アンケート

1. 授業を運営するうえで困っている点、悩んでいる点（多い順）

- メディアの効果的な利用方法（4）
- 学生の興味を喚起させる方法（4）
- 学生の授業理解度（4）
- 学生とのコミュニケーションのとり方（3）
- 授業進度（3）
- 学生の授業に対する満足度（2）
- 学習目標の達成度（2）
- 板書の仕方（1）
- 学生の私語対策（1）
- 評価方法（1）

（ご意見）

- ・声をあげない全体のニーズと個別な意見とのバランスをどう保っていくのか。
- ・学生アンケートの結果をみても、結果を客観的に捉えることが難しい。
- ・レベルの異なる学生に、どのレベルの内容を話すのが良いか、工夫はしているが、常に悩んでいる。（同様の意見が、他1件あり）
- ・学生の外国語能力に幅があり、どのあたりに焦点を当てれば良いか、先生方からもっと情報をいただきたい。また、レベルにより効果的な勉強方法が異なるので、先生からご指南いただければと思う。
- ・スピーカーやプロジェクター等、教室のハード的条件が良くない。
- ・新しいメディアを使いこなせるよう、教員を支援する組織が必要ではないか。
- ・就職活動の早期化により、授業外の勉強を重視する授業を行うことが、事実上困難となっている。これは、各教員、大学の努力を超えた社会全体の問題である。

2. 次回シンポジウムのテーマとして希望するもの（多い順）

- 公開授業の実施（8）
- 授業改善のための専門組織の設置（7）
- 授業運営に関する講演会・研修等の実施（6）
- メディア活用方法などの講習会の実施（5）
- 授業運営についての意見交換会の実施（3）
- 導入教育の実施（2）

（ご意見）

- ・学部専門科目の達成目標に関するものと、教職課程のように実践性の高い課題をもったカリキュラムとの、全体的な目標達成に関するFDの実行方法。
- ・安岡先生のご講演でも触れられていたが、セメスター制度の本当の目的について、共通理解をもつ必要がある。
- ・より高い教育効果を得られるための教育体制・環境作り（カリキュラム、時間割、教室設備等）を考えていくために、他大学（海外の大学を含めた教育機関）等の事例を理解したい。

3. その他のご意見

- ・ご講演のなかであった、「教員の研究、教育、行政活動」のバランス等についてもっと議論すべきではないか。
- ・学問入門講座、知の総体的な変化が起きる中、学部・学科あるいはFDの基礎的な単位（教員集団）そのものが、融合的、協働的な形に分解、再編されつつある。そのなかで、本学の建学の精神に基づく人間・人格形成についても、新たな視点から捉えなおし、それに即したFDの実行体制の整備が今後の課題になると判断される。
- ・授業アンケート項目を、理念や教育目標と照らし合わせて、よく練ることが必要だと思う。
- ・学生には、判断力や思考力を養わせるとともに、多様な考えをもち、また多様性を受け入れる人格を形成することも必要。1つの方向に向かう傾向が社会全体にあるので、本学なりのFDを考えるべきである。
- ・学生の評価に振り回されないことも大切である。
- ・大学という組織の複雑さを感じた。教えるということは、学ぶ対象の存在が必要条件になっていることを再確認すべきである。
- ・FDについてこれまで自分が考えていたことが非常にあいまいであったと感じた。講演を通じて、FDとSDをどう考えていけばよいか、多少掴むことができたと感じている。こういう機会を増やすことにより、業務の前提として全スタッフの共通認識をもつようになれば、業務の意義、達成感をより深めることが可能となるのではないか。

FD合宿研修会の開催

実施の目的、実施概要

先に開催されたFD公開シンポジウムでの「FD活動を活性化するためには、教員・職員・学生・経営者の積極的なFD活動への参加が、重要な課題となる」旨の提言を受け、FDプロジェクトチームでは、中でも特に重要な点として「大学全体としての教育力向上のためには、教員集団の能力開発ばかりではなく、職員集団の能力開発（SD：スタッフ・ディベロップメント）も同時に取り組むべき必要がある」と考えた。そこで教員・職員・学生・法人の四つの車輪が協力し合って前進する「四輪駆動」型のFD体制を構築する第一歩として、FDプロジェクトチームの合宿研修会が企画、開催された。現在では各業務を通して教員・職員相互の接点はあるものの、業務や部署横断的に意見交換する制度をもたない本学において、今回は職員の所属部署も様々であるが、むしろそれぞれの視点で感じている率直な意見を出し合おうという趣旨である。当日は教員4名、事務職員8名、計12名が参加した。（実施概要は別掲のとおり）

ディスカッションに入る前に、FD活動の背景や他大学の実施状況説明及びSD活動の実事例を教員・職員それぞれより報告し、現状についての理解を共有することとした。その後、教員から見た職員像、職員から見た教員像なども含め、各自が認識している問題点等について率直な意見交換を行った。非常にタイトなスケジュールにも関わらず熱心な討論が続けられ、職員と教員との間での意思疎通が図られるとともに、FD問題、SD問題の所在と解決の方向性について、ある程度の合意を得ることができた。何よりも、職員と教員が一緒に取り組んだことは、青山学院の歴史上画期的なことであった。

主な意見

議論で扱われたテーマは、職員研修のあり方、事務組織のあり方について、青山学院大学の社会的役割について、青山学院大学の教育理念について、情報の発信の仕方、シラバスのあり方、教員のコスト意識について、FDプロジェクトチームの役割について、職員と教員の意思疎通について、など多岐にわたった。こうしたオープンな意見の交換がなされたあと、FDプロジェクトチームの短期目標と長期目標についての議論がなされ、解散となった。以下主な意見を挙げておこう。

- ・教員だけ、職員だけでFD、SDを行うのではなく、学生や法人も含め相互に連動しながら四輪駆動で、青山学院独自のFDを、将来的に構築していく必要がある。
- ・評価対策のための外圧的なFDではなく、大学の活性化につながる内発的なFDを構築していく必要がある。
- ・青学全体のFDを考えたとき、大学全体の教育理念や教育目標について共通理解を深め、教員、職員、学生、法人

文学部・教授 今井 重孝

（FDプロジェクトチームメンバー）

が一丸となって全学的な教育理念、教育目標実現に努力する必要がある。

- ・教員の役割、職員の役割、学生の役割、法人の役割を明確化し、相互に協力し合う体制を作り上げる必要がある。
- ・様々な部局で行われているFDをネットワークで結び、その成果が継承されていくような恒常的な組織を作る必要がある。
- ・大学の長期展望、中期展望、短期展望を明確化し、それとのかかわりでFDのあり方も発展させていく必要がある。
- ・FDが成功するには、大学への帰属意識も大切となろう。

「2005年度第1回FD合宿研修会」 実施概要

日 程：2005年9月9日（金）～10日（土）（1泊2日）

場 所：熱海

テ ー マ：「青山学院大学の行方 —教員と職員がコラボレートする新たな関係の構築—」

タイムテーブル：

（司会進行・FDプロジェクトチーム 今井 重孝）

9月9日（金）

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 12：40 | 現地集合 |
| 13：00～13：10 | 自己紹介 |
| 13：10～13：20 | FD合宿研修会開催の目的について |
| 13：20～14：00 | FDプロジェクトチームのこれまでの活動経過 |
| 14：00～14：45 | 他大学の事例紹介「FD活動の現状と新たな課題」 |
| 14：45～16：05 | 他大学の事例紹介「SD活動の現状」 |
| 16：10～18：00 | ディスカッション1「現状の問題点」 |
| 19：45～21：45 | ディスカッション2「問題点への対応」 |

9月10日（土）

- | | |
|------------|-------------------|
| 9：00～12：00 | ディスカッション3「今後のあり方」 |
| | 総括 |
| | 現地解散 |



経営学部・教授 田中 正郎
(FDプロジェクトチームメンバー)

長年に亘り青山学院大学に勤めているが、自分の属している学部の教員は別として、他学部の教員や、ましてや職員との交流はほとんどなかったと記憶している。これまで職員とは事務的なことでしか接する機会がなかった。FD合宿研修会に参加して、初めて若い職員と学校のあり方について話し合うことができた。予想していたが、色々な話題について討議する中で、学校をよりよくしたいという思いを職員の間で共有していることを実感した。他方で、職員だけではどうにもならないとの意識があることが分かった。

合宿中における討議を通して、教員はどちらかと言えば理念論に走りがちなのに対して、職員は青山学院大学という固有の存在を強く意識しているように感じられた。理念も必要だし、現実に対する対処も必要である。職員と教員とが連携することの重要性を再認識させられた2日間であった。

国際交流センター事務局 石井 智子
(FDプロジェクトチームメンバー)

1泊2日という短い時間でしたが、FD合宿研修会に参加させていただき一番有益であったのは、教員、職員それぞれが置かれている現状の問題、問題点への対応等についての情報を共有できたことです。

特に、職員として業務上でよく感じることは、部署間である問題についての意見交換や情報共有があまりなされていないが、なされていても一般の職員の耳にはなかなか届いてこないということだったため、今回、他部署のメンバーの意見を伺ったり、業務上の問題点やその対応についての情報を得られたりしたことは大変有意義でした。さらに、教員からの授業改善の取り組みについての報告等、多方面からFD活動についての情報を得ることができました。

合宿形式の研修を年に数回行うのは困難だと思うので、学内でも意見交換会のような同様の研修会を開催し、FDプロジェクトチームメンバーに限らず学内全体で教職員が同じ問題に取り組んでいるという共通意識を持つことができればと思います。



学務部教務課 鳥海 貴裕
(FDプロジェクトチームメンバー)

FD合宿研修会に参加して、私のFDに対する考え方は大きく変わりました。

合宿に参加する以前にもFDを事務職員の間でとりあげる機会はあったのですが、振り返って考えてみますと、その時点での私のFDに対する考えは、大切な芯がぬけているものでした。

FDで最も大切なことは、組織構成員全員の参画、本学では法人・教員・事務職員・学生が協調してFDに参加する体制をつくることに考えております。これは第1回FD公開シンポジウムで慶応義塾大学の井下理先生がお話されていた事ですが、シンポジウムの時点で私はこれを理解はしたものの、考えの根幹に置くということまではしていませんでした。

私はFD活動の到達点を「本学における大学教育の方向

性を定め、それを達成させること」にあると考えております。これは合宿に参加する以前も、そして現在も変わっておりません。

しかしながら、私は合宿に参加し、教員の先生方、事務職員の方々のご意見を聞き、わずかながら私自身の意見を述べ、本学FDプロジェクトという組織の雰囲気味わうことで、FD活動が「本学に関わる全ての人々が協同し、本学を活性化させていく体制づくり」を実現する可能性をもっていることを実感しました。そのことは、私のFDについての考えに軸を持たせただけでなく、日々の業務に取り組む姿勢にも良い意味で影響し、現在担当している業務、そして私自身がどのような位置付けにいるかを再認識するきっかけになったと感じています。

授業公開の実施

実施の目的、実施概要

先に開催された「第1回FD公開シンポジウム」(2005年6月15日開催)の際、出席者から提出されたアンケート調査の中で「公開授業の実施」を望む声が多かったため、授業公開ウィークとして2005年11月7日(月)から11月12日(土)の1週間を設定して実施した。

授業公開は、授業を公開することにより、公開する教員側は今までの授業を改めて反省し工夫する契機とするとともに、参観する側は、他の教員の授業を見学することにより授業の新しい展開の可能性のヒントを得ることを目的としている。さらには、また、授業公開者と授業参観者が意見を交換することにより、授業の質の更なる向上を図り、ひいては、日常的に授業をめぐる対話がなされるような風土が醸成されることを目指したものである。

公開の方法としては、全授業を公開する、授業評価で高い評価を得た授業に公開をお願いする、などの方法も議論はされたが、ひとまず希望する教員に申し出てもらう方法

文学部・教授 今井 重孝

(FDプロジェクトチームメンバー)

を取るようになった。いったい何人の教員の協力が得られるか全く予測がつかなかったが、20名28科目という思いのほか多くの公開参加が得られ、改めて授業公開への教員の熱意を感じた。なお、授業参観者はのべ25名であった。

授業参観者へのアンケートについては、公開者全員がアンケートに賛成との回答だったので、授業参観者は参観した授業についての感想を係の事務員に提出し、その感想は、授業公開者にフィードバックされるとともに、授業公開者の方からも、いろいろと感想・意見が寄せられた。

総じて、公開の意義を強調するコメントが多かったが、公開者や参観者の数がさらに増えるように工夫すべきであるとの声も聞かれた。

今後の方向としては、全学的な授業公開ウィークを発展させるとともに、各学部や学科単位でも授業の質向上のための方策としてカリキュラム、シラバス、授業方法について恒常的に検討するグループが立ち上がってくることが期待される。

教員相互による授業公開科目一覧

No	開講 キャンパス	授業日	時限	所属学部(学科)	教員氏名	授業科目名	教室番号	受講 者数
1	相模原	11月 7日(月)	2	経営学部	岩田 伸人	現代社会の諸問題(総合科目)	E305	156
2	相模原	11月 7日(月)	3	法学部	大山 和寿	民法Ⅱ	F308	81
3	相模原	11月 7日(月)	3	理工学部(化学・生命科学)	田代 朋子	分子生物学	D316	99
4	相模原	11月 7日(月)	4	経営学部	尹 志煌	会計学基礎論	E103	239
5	相模原	11月 7日(月)	5	経営学部	尹 志煌	経営実践基礎Ⅰ	E206	120
6	相模原	11月 8日(火)	1	理工学部(機械創造工)	隆 雅久	材料力学Ⅱ	D415	89
7	相模原	11月 8日(火)	2	文学部(教育)	今井 重孝	教育社会学概論	D316	132
8	相模原	11月 8日(火)	3	国際政治経済学部	渡邊 千秋	スペイン語Ⅰ(A)-2	B404 ※CALL教室を 使用	20
9	相模原	11月 8日(火)	3	文学部(教育)	今井 重孝	比較発達社会学	F301	65
10	相模原	11月 8日(火)	3	理工学部(情報テクノロジー)	富山 健	PID制御	E104	130
11	相模原	11月 8日(火)	4	国際政治経済学部	仙波 憲一	ミクロ経済学入門Ⅱ	E104	141
12	相模原	11月 8日(火)	5	国際政治経済学部	仙波 憲一	フレッシュャーズ・セミナー	D112	12
13	相模原	11月10日(木)	1	理工学部(化学・生命科学)	中田 恭子	科学・技術の視点(総合科目「色」)	E307	81
14	相模原	11月10日(木)	1	理工学部(化学・生命科学)	長谷川 美貴	科学・技術の視点(総合科目「色」)	E304	80
15	相模原	11月10日(木)	2	法学部	西澤 宗英	裁判と法	E301	450
16	相模原	11月10日(木)	3	理工学部(化学・生命科学)	阿部 二郎	量子化学Ⅱ	F407	72
17	相模原	11月11日(金)	1	文学部(教育)	今井 重孝	自己理解(総合科目)	E305	152
18	相模原	11月11日(金)	2	国際政治経済学部	内山 義英	国際経済学Ⅱ	D417	37
19	相模原	11月11日(金)	2	理工学部(化学・生命科学)	長谷川 美貴	無機化学A	D416	113
20	相模原	11月11日(金)	2	理工学部(情報テクノロジー)	Martin Duerst	情報数学Ⅰ	E203	180
21	相模原	11月11日(金)	3	理工学部(化学・生命科学)	中田 恭子	科学・技術の視点(総合科目「水」)	E307	109
22	相模原	11月11日(金)	3	理工学部(経営システム工)	松本 俊之	IE技術	E202	155
23	青 山	11月 7日(月)	2	法学部	申 恵丰	英語文献講読	15406	23
24	青 山	11月 7日(月)	6	国際マネジメント研究科	武田 澄広	デリバティブ	536	12
25	青 山	11月 8日(火)	3	国際政治経済学部	内山 義英	国際貿易Ⅱ	224	80
26	青 山	11月10日(木)	7	経済学部	白井 邦彦	演習	15304	13
27	青 山	11月11日(金)	4	文学部(教育)	今井 重孝	教育社会学演習	14501	17
28	青 山	11月11日(金)	6	文学部(教育)	杉谷 祐美子	教育学	1143	66

授業公開者・授業参観者からの主な意見

第1回目の授業公開で得られた知見は、ほぼ以下のようにまとめられよう。

I. 授業公開者アンケートより抜粋

- (1) 授業公開実施によって緊張感をもって授業に臨み、自分の授業を見直す良い刺激となった。
- (2) 学生を教えることの「プロ」になるためには、この企画はよいものと思われる。
- (3) 多様な教育観や学生観について教員同士で率直に議論を交わし、授業改善を模索する機会が必要である。
- (4) 参観者のコメントにより、改めて自分の授業を工夫する機会があたえられた。
- (5) 公開授業の多さ、少なさというのはあまり問題ではなく、むしろお互いの授業を見合って意見交換を図る、そういう集団を徐々にでも構築していくことが全体的な授業改善につながるのではないか。
- (6) 1つ授業を公開して、3つか4つ授業を参観するほうが勉強になるのではないか。
- (7) 教室の設備・装置を整えることも重要である。スクリーンと黒板とを併用して初めて意味をもつこととなり、学生が勉強しやすい環境・設備を整えるのは大学の責任である。
- (8) 事務の方が参観してくださり、コメントをくださったことで、教職員の間の一体感が増した感じがし、授業改善以外にも、相互理解の増進に寄与することがわかり、これは新しい発見であった。

II. 授業参観者アンケートより抜粋

- (1) 他の先生の様々な授業に対する工夫を学ぶことができた。
- (2) 参観した授業から学んだ内容をすぐさま授業で実践し、板書の書き方、授業の進め方において成果をあげることができた。
- (3) 他の先生方の授業を拝見させていただく機会があることは大変貴重なので、是非続けてほしい。
- (4) 90分という授業時間の長さを体感し、90分の使い方を工夫しなければ現在の学生は集中して聴講することが難しいと改めて感じた。
- (5) 現実の問題と結びつけることによって学生の関心を引き出し、また図を手書きさせることで、授業への参加意識を高めているように見えた。
- (6) 受講者数が多くても、机間巡回をしたり、Q&Aをしたりすることも可能であるという点で参考になった。
- (7) 授業開始時に本日の講義の概要を説明することで、目的意識が高められている。
- (8) 多くの実験や分光器の作成など、様々な工夫がこらされており、学生の注意・関心をうまく集める大変めりはりのついた授業であった。

こうしたアンケート結果に基づいて、2006年度の授業公開をさらに成果の多いものとして展開する予定である。



理工学部・助教授

松本 俊之

担当している授業で、現場の実例やビデオを用いて分かりやすくし、演習による体験的学習などで授業内容を工夫してきた。しかし、「よりよいやり方があるのではないか」といつも疑問に思っている。

それぞれの授業では教えたいコアがあり、それを学生にとって、知る→わかる→使える状態にするには、難しい内容でも易しく教えることが大切だと思う。そのためには、学生に意外性、驚き、感動を与える工夫が必要だと思う。

大学全体で行われている「授業改善のための学生アンケート」によって学生の視点から授業のやり方をみることができ、「授業公開」によって職員や教員同士で授業のやり方を客観的にみるのが可能になった。将来は、毎日が授業公開になり、よりオープンな状況のもとで関係者全員で教えるための工夫を行い、教育の方法を向上させることが望ましいと思う。

教員には研究と教育の両者が重要である。今後も教えることのプロを目指して、「学生さんに感動して頂く」ために授業の工夫を続けていきたい。

授 業 公 開 者 の 感 想

今年度は、初めての試みとして、教員が他の教員の授業を参観し、自らの授業の参考にするという授業公開の企画を実施した。各学部の教授会を通して事前に先生方に周知し、ご協力をお願いしたところ、相模原キャンパスで22、青山キャンパスで6と計28の授業について公開の承諾が得られ、11月の第2週に行われた。実施の結果、参観者は計25名で、半数以上の授業は事務職員を除き参観者がみられなかった。しかしこれは、教員が自分の授業と重なっている等のために時間を取りにくいという要因もあると考えられる。

授業公開の当日は、参観者にアンケートとして感想や意見を書いていただいたが、総じて詳細な感想をお寄せいただき、授業担当者にとっても参考になったと思われる。また、執筆者自身授業公開に参加したが、感じたことは、授業を公開することそれ自体が、担当者にとって一定の緊張感をもたらすということである。このような企画を今後定着させることによって、多くの教員の間に、授業に対する適度な緊張感と、互いに切磋琢磨し合うための刺激が生まれることになればと思う。

法学部・助教授

申 恵丰

(FDプロジェクトチームメンバー)

理工学部・専任講師

中田 恭子

(FDプロジェクトチームメンバー)

私はスタンダードの総合科目を公開した。「色」という講義では大教室で実験を行う。簡単なものだが、授業中に何度も学生に作業をさせる。こちらも前日夜に教室を準備する。実験で得た結果だけから何が言えるかを考えさせ、それを積み重ねることで自然科学の思考を体験させるのが目的である。大半が文系の受講生に対して実施し、比較的手応えのあった科目であるが、それに対する客観的なアドバイスを求めるのが公開の目的であった。参観者は少なかったが貴重な意見をいただいた。欲を言えば、遠慮せずに改善すべき点をもっと書いて欲しかった。しかし後日自分が参観者になり、的確にコメントする難しさを実感した。我々の現状は、カリキュラムや授業について日常的に話し合う教員組織からは程遠い。この授業公開も現段階で成功とは言えない。これが根づいて、教育集団としての理想を持った風通しの良い組織が実現したとき初めて、この試みが評価できると思う。

150人位の授業と15名程度の少人数の授業公開を参観させて頂きました。私も両方の規模の授業を担当しているため、他の先生方がどのように授業を進められているか非常に興味を持っていました。

大教室での授業では授業開始時に本日の講義の概要を説明し、授業に対しての目的意識を高めるようにされていました。授業の進め方においてはわかりやすい例を挙げ理解度を高めたり、以前のノートを参照させて復習効果をもたせるように工夫をされていました。また、学生が積極的に参加できる環境を作っていたと思います。

少人数の授業ではテーマについて自分で調べるという自主性を重視している点が学習意欲を高めていたと思います。また、学生同士にディスカッションさせることで積極的に参加しているという意識が感じられました。

今回、2つの授業を参観させて頂きとても参考になりましたし、何より久しぶりに学生の気分を味わうことができたのがとても新鮮に感じられました。

このような形で、他の先生の授業を拝聴できる機会を設けていただき、感謝しております。模範授業のように他の教員に見せることを前提としたものではなく、普段学生に対してなされている授業を拝聴でき、大変参考になりました。拝聴したうちで特に驚いたのは、100人以上受講生がいるにもかかわらず、概括的な知識をまず講義方式で伝えた後で、グループディスカッションをさせる授業でした。この授業を拝聴して、人数が多くても、学生に考えさせる様にし向ける様に工夫する余地があることを知ることができ、今後参考にさせていただきたいと存じます。

ただ、このようなすばらしい機会であるにもかかわらず、都合が悪く、参加できないことが多くありました。2006年度以降については、実施期間を伸ばしたり、後期だけでなく、前期にも行うなどの工夫を期待したいと存じます。

授業参観者の感想

情報科学研究センター事務室 祖父江 健一
(FDプロジェクトチームメンバー)

教員がどのように授業を展開し、学生がどんな姿勢で授業に臨んでいるのか。大学職員は授業という現場を理解せずに、教員への教育支援ならびに学生の視点に立った学習支援サービスを十分に提供できるのだろうか。

今回、FDプロジェクトチームメンバーとして相模原キャンパスでの授業公開に参加。1人は良い意味で師弟関係のような繋がりにて学生を思いやる教員。もう1人は個々の学生との対話を重視するエネルギー豊かな教員。共通キーワードは「情熱」と「コミュニケーション」。教育に一番必要なことは何か。2人の教員の授業から、忘れかけていた教育の原点を教えられたような気がする。

大学職員に意識改革と役割の見直しが問われている。われわれ職員も年に1度くらい授業という最前線の現場に赴き、教員の声や学生の動きをライブで見聞きし、刺激を受けてみてはどうだろうか。ルーチンの業務を改善するきっかけ、新たなサービスを展開するヒントなど、感じ取れた何かが教育の質を高める改革に結びつけてくれるはずだ。

素晴らしい熱き授業を参観させていただき、先生方にはあらためて感謝申し上げます。

教育・学習支援ユニットメディアライブラリーグループ
武田 智恵子 (FDプロジェクトチームメンバー)

「教員相互による授業公開」ではFDプロジェクトチームメンバーの相模原キャンパス担当として7科目のアンケート回収業務を担当した。

回収業務を行いながら、公開授業を見学させていただいた。授業公開を申し出て下さった先生方はどなたも教育熱心であると感じさせる授業を行われた。専門科目かスタンダード科目かなど科目によって資料の揃え方、学生への伝達手段などさまざまな違いがあったが、どの先生からも、もっとよい授業を行いたいという熱意が伝わってきた。

実際に授業に入り、学生として教室の椅子にすわり、授業を受けるという体験は新鮮なことだった。教室内で、学生の立場から授業を体験し、ある場面では先生の立場で授業を見て、実際の授業でなにがおこなわれているのか、先生方や学生がどんなサポートを求めているのか、なにが不快なのか、なにが必要なのかを考えることができた。

1週間という短い期間であったため、参観があった授業はわずかだったのが残念だ。また、アンケートはとったが、企画に賛同して下さった先生方へのフィードバックが十分であったのかが気がかりである。しかし、この企画が1度の実施で終わるのではなく、よりよい授業のための取組みへの契機となることを願っている。

学生モニターからの意見聴取

実施の目的、実施概要

学長室 本橋 正人

(FDプロジェクトチームメンバー)

大学は、大学のステークホルダーである学生からも意見を十分に聴取し、より良きコミュニケーションを図る必要があるとの考えから、2005年4月より広く一般学生より意見等を寄せてもらうシステムを開始したが、このシステムをさらに有効に機能させるために、学生を選定し、継続的に意見等を求め、より良い大学の構築・運営に反映させることを目的として始めたものが「学生モニター」の制度である。これも2005年4月より始められたが、2005年度は学生モニターとして教学面で大学と接点のある、以下の3項目に該当する学生を選定した。

①「2004年度給付奨学金受給者、学業奨励賞受賞者のうちの2005年度在籍者」

②「IT-A (ITアシスタント)」

③「青山スタンダードSA (スチューデント・アシスタント)」

これらの対象者のうち、計120名の学生よりモニター承諾の回答を得られた。

学生モニターに対し、「授業環境」、「事務窓口」について次のとおり意見を求めた。

(1) 授業環境について

「学生のみなさんより、授業に関し、私語、遅刻、途中退席等により、授業環境が悪化し、強く改善を望む声が数多く寄せられました。このため、大学は、学則に基く処罰もあり得るとの厳しい内容を含んだ授業受講上の注意を学生のみなさんに促し、同時に先生方に対してもより良い授

業環境の維持をお願いいたしました。

このような授業環境について、みなさんはどのように感じていられるか、また、どのようにしたら改善の方向にむけられるかについて率直なご意見を伺いたと思います。」

(2) 事務窓口について

「窓口は学生の皆さんと大学との大きな接点のひとつですが、どのような事務窓口が理想的だと思われますか。ご意見、ご提案等をお寄せください。」

意見聴取(アンケート調査)は、学内情報サービスを使い、当該学生モニターに依頼文を発信し、所定のメールアドレスに返信してもらうことによって行ったが、25名の学生モニターより回答があった。いろいろな意見が寄せられたが、問題意識の高いものが多かった。〔調査結果概要について別掲参照〕

学生モニターを選定し、意見を聴取することは有益だと思う。学生モニターから意見を聞くことによって、学生の意見のある程度の確かさをもって判断することができるからである。また、モニターの選定が大学と学生との繋がりをより深める良い機会になると思われるからである。ただし、モニターの選定、意見聴取の方法・方策等について、工夫が必要であり、継続して実施していくことが大切だと思われる。いろいろな学生モニターの選定により、より確かな学生の実像が浮かび上がってくるように思われるからである。

2005年度 学生モニターへのアンケート調査結果概要

1 授業環境について

※授業の妨げとなりうる受講生のおしゃべりや携帯電話の使用、途中退室等に対して、授業の質を維持、向上させるためにはどうすればよいか。

①全ての教員が毅然とした態度で注意等の対処をおこなうべきである。

②TA (ティーチング・アシスタント) を配置すべきである。(注意をさせるため)

③出欠をとるべきではない。

④教員は、学生参加型の講義をしたり、また受講生の興味をそそる授業をおこなうよう工夫すべきである。

⑤学生自身が大学で授業を受けることについての認識を改めるべきである。

⑥受講生(上級年次生等)が互いに注意しあうべきである。(在学生同士による大学生活をよりよくする仕組みの導入)

⑦学生・教員双方が互いに厳しく評価しあうべきである。

⑧大学による注意を継続して実施していくべきである。

⑨大教室は使用すべきでない。(教室の後部に受講生を座らせない。)

⑩注意だけでなく、処罰をするべきである。〔するべきでないとする意見もあり。〕

よい (5名)

どちらともいえない (3名)

よくない (2名)

・事務窓口について

①窓口に来る学生を「お客様」、「大人」として対応すべきである。

②学生に関連する事務窓口は一つにまとまっていたほうがよい。

③窓口時間を第二部の授業終了後でも利用できる時間にしてほしい。

→相模原キャンパスでは、5時限終了まで窓口を開いてほしい。

④対応する職員によって態度が違うことがある。(組織的な対応が感じられない。)

⑤質問に即答できる業務内容の把握をすべきである。

⑥サービス業による研修を導入してはどうか。

⑦事務窓口に関する、学生の認知が不足している。(大学による案内の不足?)

3 その他

①大学をあげて省エネルギーに取り組んでいる一方で、学食等の冷房が効きすぎである。

②構内における喫煙について、喫煙場所にも配慮すべきである。

2 事務窓口について

・現在の事務窓口に対する印象

学生モニターとの意見交換懇談会の開催

実施の目的、実施概要

2005年12月7日（水）13:00～15:00相模原キャンパス B737会議室において、「学生とできること 教員とできること 職員とできること ―ハッピーシェアリングを目指す FSSD OF A. G. U. のスタート―」と題して、学生モニターと教職員（FDプロジェクトチームメンバー）との意見交換懇談会が行われた。学生モニター2名、教職員11名（教員3名、職員8名）が出席した。

この意見交換懇談会は、すでに実施されていた「学生モニターからの意見聴取」とも関連させて行われたものであるが、直接学生と対話をし、学生の生の意見を聞くことによって学生と教職員との双方向でのコミュニケーションを図り、より良い大学の構築・運営の一助とすることを目的として行われたものである。開催場所を相模原キャンパスとしたのは、学生モニターの所属キャンパスが、青山キャンパスよりも相模原キャンパスの学生が多かったこと、また午後1時から3時までの開催としたのは、第二部の学生に配慮したことによるものである。

意見交換懇談会開催に当たり、学生モニターに対して学生情報サービスにより告知をし、積極的な参加を呼びかけた。アンケート調査（意見聴取）時に、すでに意見交換懇談会開催について予告してあったが、大学のFD活動の一環として学生との意見交換懇談会を行うのは初めての試みであったため、どのくらい集まるか、正直なところ不安があった。いざふたを開けてみると、残念ながら不安は的中し、参加申込者は2名であった。このため、FDプロジェクトチーム内では開催を延期してはどうか、との意見も出たが、人

学長室 本橋 正人

（FDプロジェクトチームメンバー）

数が少なくともじっくり話し合う理点もあるということ、まず実施することが大切ではないか、との意見でまとめ、実施の運びとなった。

懇談会は、まずFDプロジェクトチームリーダーである副学長仙波先生のご挨拶があり、次に出席者よりそれぞれ自己紹介があった。この後、文学部今井先生の司会進行のもと、「授業環境」「事務窓口」「学生生活」の3テーマについて意見交換が行われた。学生、教員、職員と、立場は違っても各自一個人として意見を述べ合い、活発な意見交換が行われた。参加した学生が2人とも積極的に率直な意見を述べてくれたので、予想以上に充実した懇談会となった。あっという間に過ぎた2時間であった。〔意見交換の内容について別掲参照〕

今回の意見交換懇談会は、その位置づけを充分詰めた上で実施されたものではなかった、と言うのが正直なところである。学生モニターの出席者が2名であったということに象徴されるように、いろいろな課題、問題点等が示された懇談会であったと思う。しかし、反対に今後につながる、また繋ぐべき懇談会になったとも言えるように思う。



意見交換懇談会での主な意見交換の内容

1 授業環境について（授業時の私語について）

- ・第二部の場合、時間割の配置が6時限に集中していることが、却って受講者を限られた科目に集中させてしまい、その結果、私語が増えてしまうことが起きてしまっている。授業時間の配置にも大きく左右される。
- ・勉強をするために大学へ行くという意識を持っている学生は2～3割くらいではないだろうか。
- ・私語が多く、騒がしい講義についてどう対応するかを考えるよりも、大学全体として学生の学習意欲を持たせるためには、どうことができるのかということを考えるのが重要である。
- ・将来に対してのビジョンがないため、勉強をするために大学へ行くという目的意識を持っていないことが、学習意欲をあげられない原因なのではないか。
- ・カリキュラムとして、初級年次からのゼミナール形式の授業に上級年次の学生を関与させることで、目的意識や学習意欲を持たせるのはどうか。
- ・授業評価アンケートは記入する時間が短くてかけないことがあるだけで、書きたいと思っていることが書けないわけではない。

2 事務窓口について

- ・事務職員として、窓口対応の仕方を組織的に実行してほしい。
- ・学生に対して横柄な態度をとるという意見もあるが、迎合せずに毅然とした態度で指導することも必要である。
- ・青山キャンパスの事務室は相模原キャンパスの事務室と違い、物理的に閉鎖されている印象を受けてしまう。
- ・基本的に窓口を利用することがほとんどない。
- ・学生情報サービスのメッセージ発信の効果については、受信する学生における情報への重要性によるところが大きい。

3 学生生活について

- ・昼食の時の時間をあえて多くとらずに、休み時間をすべて同じ時間に設定して、時間割の配置の仕方や学生の履修の仕方を工夫して、各々で休み時間をとるように変えてみてはどうか？
- ・学生の投書で一番多かった喫煙についての対応は今後も検討を重ねていくことが必要。
- ・教職員専用トイレをなくし、学生も共有できるようにしたほうがよい。

私は、教員の方や事務職員の方との意見交換懇談会が開催されるにあたって、その場に学生モニターとして参加させていただくことは、大変名誉あることだと思っています。

また、今後の大学のあり方を、教員、事務職員、学生と異なる立場の人々が議論することは、一方的な視点にとらわれず、多角的な視点からのアプローチが可能となり、意義深いものであると思います。

そして、意見交換懇談会においては、日々の授業、学生生活全般に関する議論が行われ、どのようにすれば教職員

と学生がより快適に大学での意思疎通が図れるのかといったことが模索されました。このような議論が行われることは、今後の大学としての改善点を探る良い機会であったと思います。

次回以降この意見交換懇談会がより充実したものになるためには、より多くの学生が出席することが不可欠です。そのためには、開催場所や開催時間の調整も必要になると思います。私は、この意見交換懇談会が、より発展していくことを期待しています。

意見交換懇談会に出席して

学務部教務課 戸田 隆也 (FDプロジェクトチームメンバー)

青山スタンダードの到達目標に「およそ青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかに関わり無く、一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けること」とあるが、この目標達成のためには高い水準の技能・能力・知識・教養をそなえている講師陣、そしてそれをサポートするスタッフ・設備が備わってこそはじめて具現化できるものであり、したがって今や大学におけるFD活動は必要不可欠のものであるといえる。

今回開催された学生モニターとの意見交換会は、学生と大学執行部代表者を含めた教職員が同席し、意見交換を行うという画期的な試みであった。少なくとも筆者には、大学主催のこういった機会は初めてであるように感じられたものである。

この記念すべき第1回意見交換会に参加した学生モニターは2名という僅少なものであったが、これは、①開催時期が

授業期間中であったこと、②開催地が相模原キャンパスであったこと、③モニター対象学生が“給付奨学金及び学業奨励賞対象者”等に絞られたこと、などが考えられるが、最大の理由は企画立案～準備実施までに、ほとんど時間が取れなかったことではなかろうか。そういった中でも、開催してみるとなかなか密度の濃い2時間強の時間をすごすことができたのは、ひとえに参加した学生の真面目さ・意識の高さに起因するものである。教育・研究の場をサポートする事務職員としては、感謝せねばならないと同時に、大いに襟を正さなければ…

参加者僅かに2名であっても、今回のごとく色々建設的な意見・提案・要望を得ることができるのである。それならばこれがもっと多くの声を集められたとしたら…次回第2回開催にあたっては、学生モニター参加者を増やし、賑やかなもの（例えばグループに分かれて意見交換できるくらいの）にする努力をしてみたい。

事務システム室 藤田 陽一朗 (FDプロジェクトチームメンバー)

この意見交換会が、継続的なものになって欲しいという思いも含め、「第1回」と実施回数を表示して企画・実施したのであったが、参加者の少なさ、私達のSDやFDに対する知識の乏しさ等もあり、必ずしも成功した1回目であったとは言えない状況であった。さらに、意見交換会で出た意見をどう取り扱っていくかというSD・FD本来のすべき段階まで辿り着いていない状況でもある。

しかし、非常に意識が高い学生からの提案や疑問を直接聞けたことは、参加した教員・職員が、それぞれの立場において、誰と何ができるのかを抽象的ながらも意識するきっかけになったことは間違いない。

それだけに、この意見交換会が、いろいろな意見を聞いて有意義な時間だったと納得するだけの自己満足な会で終わらずに、plan→do→check→actionを繰り返す活動のひとつに発展していけばと思う。

そのとき、意見交換会の実施回数が、意見交換を重ねただけの回数ではなく、PDCAサイクルを重ねている回数であると捉えられれば、会の回数が積み重なっていくことに重要な意味をもつことになる。

その第1回目が、この先の大きな差を生む小さな一歩になるのかと思いながら、職員としてできることがまだまだあると感じた貴重な意見交換会であった。

以下の2つの取組みはFDプロジェクトチームの活動ではありませんが、
全学的なFD活動の一環として掲載いたします。

学生による授業改善のための学生アンケート実施状況

本学では、昨今の高等教育においてFDがより一層重要視されていることを背景に、全学自己点検・評価委員会において検討を重ねた上で2003年度後期から全学的に「授業改善のための学生アンケート」を実施している。

実施目的は、一部の学部・学科によって実施されていた授業評価アンケートを全学に及ぼすと共に、各部局ごとの授業改善の活性化を図ることとしている。

現在、実施から3年間が経過したが、実施概要や方法については、毎年議論を重ねており、徐々に改良がなされ、定着しつつある。（「実施概要および実施方法（2005年度後期）」参照。）

集計結果の公開に関しては、実施初年度は公開をせず、担当教員へ結果を返却するにとどまったが、翌2004年度からは、全学部共通で学部や学科ごとに、「語学」や「専門科目」、また「青山スタンダード科目」といった大枠で集計したものを、学内の学生と教職員に限り、ウェブサイト上で公開している。また、学部の判断で科目ごとなど詳細な公開を行うことも可能にしており、現在では何らかの形で科目ごとの公開を行っているのが3学部と2学科ある。

別表として「過去3年間の実施率推移（全学部トータル）」を付した。対象科目における実施率については、初年度を除けば、90%前後で安定して推移している。一方の学生からの回収率については、40～50%の間で推移しており、必ずしも高いとは言えない。今後は、より授業改善に資するようなアンケートの方式を、教員・学生双方の意見を取り入れつつ検討していくこととしたい。

「実施概要および実施方法（2005年度後期）」

- ・実施対象：全教員（非常勤講師等含む）
- ・対象科目：全講義科目（演習科目・実験科目等を除く。ただし、学部の判断で実施してもよい。）
- ・実施時期：年2回（前・後期終了時）ただし、前期は前期科目のみ対象。
各定期試験期間前の1～2週間の任意の授業日に実施。
- ・アンケート項目：「選択回答式項目（15問）」と「自由記述項目」からなる。
担当教員個人および学部独自の質問項目を追加できる。
無記名式で回答者の特定は出来ない。
- ・アンケート配布・回収：教員が任意の学生を指名し、すべて学生が行う。
- ・アンケート回答時間：15分程度
- ・結果の返却：担当者個人に選択回答式の集計結果と自由記述部分を返却する。返却方法は学部の判断により、担当者本人に直接返却するか学部長や学科主任を通して返却する。
成績提出後に担当教員へ返却するため、学生の成績には影響がない。
- ・結果の公開：選択回答式項目について、「青山スタンダード科目」および各学部の「語学」と「専門科目」をそれぞれひとまとめに集計したものを全学部共通で公開する。
また、学部の判断により「科目ごと」などの公開も行うことができる。
自由記述項目の公開は行わない。
- ・公開方法：学生情報サービスおよび事務ポータルサイトにて公開。（学外者閲覧不可）

「過去3年間の実施率推移（全学部トータル）」

実施年度	対象教員	対象科目数	回収科目数	実施率	総対象学生数	総回収数	回収率
2003年度後期	専任教員のみ	789	604	76.6%	81,793	33,302	40.7%
2004年度後期	専任教員+非常勤講師	2,756	2,442	88.6%	208,551	89,289	42.8%
2005年度前期	専任教員+非常勤講師	1,143	1,045	91.4%	94,797	48,589	51.3%
2005年度後期	専任教員+非常勤講師	2,576	2,250	87.3%	186,672	81,772	43.8%

学生からの意見聴取の実施状況

本学では、2005年度よりWebによる学生への情報伝達システム「学生情報サービス」上にて、「大学へのご意見・ご要望」投稿フォームを開設した。この制度は、現学長が、大学運営の基本方針として「本学が『暮らす大学』として学生に親しまれる存在となる」ことを掲げており、大学側と学生側の双方のコミュニケーションの充実化を図ることを目的として導入された。

この投稿フォームにおいて、学生に対しては、建設的な意見・提案のみを受け付けることとし、特定の人物への誹謗中傷や、質問などはしないよう呼びかけている。また、学生自身の意見に責任を持たせることに加え、提出された意見について、大学側で個別に対応・回答が必要となるケースに備え、学生番号により投稿者本人を特定出来るシステムにしている。ただし、提出された意見全てに回答することは、初年度のこともあり見送ることとし、学生に対しては、「原則として個別に回答はしないが、いただいた意見について、大学として検討させていただく」旨を投稿フォーム上で説明し、了解の上投稿してもらうようにしている。

投稿されたすべての意見は、大学執行部および事務所管の学長室にて毎日目を通しており、該当すると思われる学部や事務局に対して意見を回付している。基本的には、その先の対応については当該部局の判断に任せている。しかし、同種の意見が多数寄せられるなど、大学として対応すべきと判断したものについては、しかるべき改善策を講じている。

現在、この制度を開始してからちょうど1年が経過したが、学生から投稿された意見は総数で約800件に上り、予想

を超える件数となっている。意見の内容は建設的なものが多く、この制度が有意義なものとなっていることが伺える。主な意見の分類については別紙に掲載するが、授業に関する意見や、学内施設に関する意見は特に多く見られ、学生の関心の高さが伺える。

これらの中で大学として対応をした例として、例えば、授業中の学生の私語について、教員へ学生に対して注意喚起を依頼する「授業環境改善のお願い」を提示し、また、学生に対しても学生情報サービスに「受講上の注意」を提示し、私語を慎むよう注意している。また、学内の喫煙場所について、2005年6月25日より「校舎内の全面禁煙、屋外の指定喫煙所を大幅に縮小および指定喫煙所以外での禁煙、歩行喫煙の禁止」を実行した。これにより、当初は喫煙場所以外でのポイ捨てなどが目立ったが、現在は落ち着いており、最近では喫煙場所に関する投稿も減少している。

また、その他「事務の窓口対応に関する事項」や「学生生活（クラブ・就職等）に関する事項」等の意見も多く寄せられており、当該部局にて改善を図ったケースもある。

これらの意見について、現在は当該部局に意見を回付するにとどめているが、将来的には、数の多い意見については、当該部局と対応について協議し、検討結果についても、学生に対して回答をすることが望まれる。

このような問題点をかかえるものの、800件にも上る学生の意見が、大学執行部へ直接届くシステムが確立され、また、案件によっては改善が図られたことは、本学が学生との双方向のコミュニケーションを充実させる上で、大きな前進と言ってよいであろう。

【「大学へのご意見・ご要望」項目ごとの分類結果（2006年3月31日現在）】

注1) 以下、それぞれの項目に、件数と代表的な意見を掲載している。

注2) 複数の項目に関係する意見については、関係する項目全ての件数にカウントしている。

注3) ☆印については、大学として対応を行い、改善策を講じたものを表す。

〈総投稿件数793件〉

①授業に関する事項（計291件）

- a. カリキュラム・時間割・履修登録に関するもの（84件）
- b. 授業要覧等配布物に関するもの（15件）
- c. 授業内容に関するもの（41件）
- d. 教員に関するもの（59件）
- ☆e. 私語など学生の態度に関するもの（25件）
- f. 教室等施設に関するもの（28件）
- ☆g. 教室の空調に関するもの（39件）

②学内施設に関する事項（計237件）

- a. 食堂に関するもの（51件）
- ☆b. 喫煙場所に関するもの（63件）
- ☆c. トイレに関するもの（25件）
- ☆d. 図書館に関するもの（42件）
- e. 情報機器（学生情報サービス含む）に関するもの（56件）

③事務の窓口対応に関する事項（35件）

2005年度のプロジェクト活動を振り返って

経済学部・助教授 白井 邦彦

(FDプロジェクトチームメンバー)

FD活動とは「教授団の能力開発」、すなわち我々大学教員の能力を高めるための活動である。大学教員の仕事は1・研究、2・教育、3・大学行政の三分野からなる。その三分野は各教員がそれぞれの専門分野およびその関連分野で独創的先進的な研究を行い、その成果を過去の研究成果と学生のニーズを踏まえながら学生に教授する、そのためには学問研究・教育の自由がきめわて重要であるからそれを制度的に保障するために大学の自治を確立する必要がある、それゆえ大学行政は大学構成員が担う必要がある、という関係にあると思う。そして大学自治という観点から大学人自らチェックを行う必要がある、そこに自己点検というもの大切さがある。私自身はFD活動および自己点検活動をこのように理解しているがこうした観点からすれば最近のFD活動については以下の2点で疑問を感じている。第一はFD活動が自己点検活動に偏りすぎて

そこに重点がおかれすぎていないか、という疑問である。自己点検はむしろFDのための手段であり、それが目的になってしまうことは本末転倒ではないか、とのことである。とくに要請される自己点検項目が多岐にわたり、そのために本来の三分野の業務にしわよせがいないだろうか。率直に言ってその危険の傾向がみられるように思える。第二は大学自治という観点からして、自己点検項目が一律に決められていることは問題がないだろうか、その項目については、学部・学問分野・与件とされている条件等に応じてもう少しフレキシブルに自己判断できるようにすべきではないか、との疑問である。

以上のような疑問を感じてはいるが、FD活動のための自己点検活動の大切さについては大学人の一人として異論はない。上記のような疑問が単なる杞憂となるような活動にしていきたいと思う。

国際政治経済学部・助教授 内山 義英

(FDプロジェクトチームメンバー)

本学のFD活動は緒に就いたばかりで、確かに課題は山積している。しかし、FDプロジェクト活動を1年間続けてきて感じることは、数こそ決して多くはないがFD活動を真剣に考えている教職員がそこそこいる、ということである。

6月に開催されたFD公開シンポジウムへの出席者は、本学教職員のごく一部であったし、また11月に実施された教員相互による「授業公開」も、参加した教職員は確かに限られた

人数であった。ただ、こうしたFD活動に参加した教職員は、意識するしないに関わらず、普段からFDを自ら実践しているようにも感じられた。

一方で、FD活動に否定的な人も少なくない。採用や昇進の際に研究業績のみが考慮されがちな教員にとって、FD活動は所詮余計なことかもしれない。FD活動にも何らかの動機づけが今後必要であろう。

2006年度の活動に向けて

副学長

国際政治経済学部・教授

FD プロジェクトチームリーダー 仙波 憲一

2005年度はプロジェクト発足1年目であったので、活動も手探り状態でした。しかしながら、各活動はそれぞれ意味のあるものであったので、2006年度も踏襲して実行したいと考えています。中でもこれまで本学にはなかった授業公開が実施されたことは、大きな成果でした。本年度はより多くの教員が参加できるよう方法を工夫して実施したいと考えております。また、他大学でのFD活動を調査し、本学で実行可能な提案を投げかけて行きたいと考えています。今後ともご高配のほどお願いいたします。

2005年度FDプロジェクトチームメンバーの構成

構成員（16名）

氏 名	所属・職位
○仙 波 憲 一	副学長・国際政治経済学部・教授
今 井 重 孝	文学部・教授
杉 谷 祐美子	文学部・専任講師
白 井 邦 彦	経済学部・助教授
申 惠 丰	法学部・助教授
田 中 正 郎	経営学部・教授
内 山 義 英	国際政治経済学部・助教授
中 田 恭 子	理工学部・専任講師
戸 田 隆 也	(青) 学務部教務課・係長代理
鳥 海 貴 裕	(青) 学務部教務課
藤 田 陽一朗	(青) 事務システム室
祖父江 健 一	(青) 情報科学研究センター事務局・課長代理
石 井 智 子	(青) 国際交流センター事務局
武 田 智恵子	(相) 教育・学習支援ユニット メディアライブラリーグループ
本 橋 正 人	(青) 学長室・課長代理
浜 本 嘉 郎	(青) 学長室・係長

○はチームリーダー

注：(青) 青山キャンパス、(相) 相模原キャンパス

本学FDプロジェクトに対するご意見・ご提案等ございましたら、下記事務局までご連絡ください。

冊子名 Faculty Development Activities Report

発行日 2006年7月25日

発行者 青山学院大学 FDプロジェクトチーム（学長室内）

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL 03-3409-7510

FAX 03-3409-9424

編集協力 ヨシダ印刷（株）

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

【青山学院スクール・モットー】